

第5回エコパークゾーン環境保全創造委員会 議事録

日時：平成20年11月20日(木) 14:00～16:00

会場：福岡国際ホール 九重の間

出席者：小島会長、内田委員、岡本委員、包清委員、田村委員、逸見委員、迎委員、
吉松委員

オブザーバ：国土交通省九州地方整備局港湾空港部海洋環境・技術課長 長掛 哲弘
環境局環境対策推進部長

(◎：会長，○：委員，□：事務局)

(議題1 鳥類の保全対策 事務局説明)

◎詳細な鳥類の現地調査から得られた結果を基に、対策が必要な野鳥を選定し検討しているが、委員の方々、意見はないか。

○アイランドシティに野鳥公園の構想があるが、野鳥の保全対策を前提に考えた際に、いつ頃を目処に整備を始めるのか。

シギ・チドリ類、クロツラヘラサギ、コアジサシなどの種があげられているが、これらの鳥類の生息環境を支援する整備の中で、目標となる数、規模を設定する必要はないのか。

□現在アイランドシティ整備事業は順次整備が進んでいるものの、野鳥公園をいつ頃整備できるのかを特定できるまでにはいたっていない。今後、埋立工事が進みアイランドシティ内の疑似湿地が消失していく中で、フロート等の対応策をとることで、野鳥公園を整備し機能していくまでの対応としては十分ではないかと考えている。このような保全策をつなぐことで野鳥公園ができるまで、エコパークゾーン内の機能の現状維持を目指している。

シギ・チドリ類などの休憩場は、どの程度の数を対象にし、どれくらいの規模が適当と考えるかということに関しては、専門家の話を伺った結果、シギ・チドリ類の休憩場は、小さい規模でもかなりの数が利用可能であるという意見を頂いている。人工磯の休憩場に関しては、今年度すでにエコパークゾーン内の牧の鼻地点の沖合に設置している。平成21年度は、フロート等の設置及び効果確認を行い、規模によってどの程度の利用が確保できるかを検証し最終的な対応策の規模を決めていく。また、シギ・チドリ類が日本に飛来する総数が20年間で4割程度減少している報告などがある。そのような中、現在飛来してくる総数を維持するのは困難であり、数値目標を明確にだすのは難しい。しかし、現在アイランドシティ内を利用している野鳥の状況をみながら、今後整備する休憩場の効果を検証した上で、どの程度の規模を想定すれば大きな環境の変化をきたさず将来の野鳥公園につないでいけるかの判断は可能であると考えている。

○エコパークゾーンのフロートなどの野鳥の休憩場が検討されているエリアの

既存陸域側では、人の土地利用行為が進んでいると思われる。人による攪乱要因をどのようにコントロールする方向で現在検討されているのかを説明して頂きたい。

□既存陸域側については、ほぼ開発済みであり人の利用については安定していると考えられる。塩浜地区の農地で都市的開発が行われれば別であるが、そのような事が無い限り現状以上の人のインパクトは無いと考えている。また、野鳥の保全対策を実施するエリアとして今回選んでいる和白干潟ゾーンと香住ヶ丘ゾーンは、今年の春に様々な関係団体、周辺地域の方々と協議して合意したエコパークゾーンの水域利用マナー作りの中で、エンジンの有無に関わらずプレジャーボートの利用を禁止している。そのためこのエリア内であれば、人の積極的な海面利用の拡大や新たな利用が行われる可能性は低く、保全策を行っていく際に効果が確実にあらわれる場所と考えている。

○今回保全対象とした野鳥の生活史についての資料を追加して頂きたい。例えば、旅鳥なのか、冬鳥なのかなどを明確にしたうえで、保全対策、保全時期を検討したい。特に保全時期は、対象とする種が旅鳥ならばフロートなどは1年中設置する必要はなく、飛来する時期だけ設置すればよい。生活史、分類、飛来理由などを資料に加えて頂くと今後計画しやすい。

◎資料を付け加えて欲しいとのことだが、この場で解答できるものがあればお答え頂きたい。

□指摘を受けた箇所については、資料の修正をしたい。博多湾に飛来する野鳥の大半が冬鳥で越冬利用である。ただ、博多湾の場所は、多くの冬鳥にとって最南端ではないため、秋や春には中継利用の野鳥も飛来する。本委員会で示した野鳥では、海ガモ類、陸ガモ類、シギ・チドリ類、カモメ・アジサシ類、クロツラヘラサギなどが冬鳥に分類される。サギ類の多くが留鳥であるため、コサギ、ダイサギなどは夏場の河川敷などでみかけられる。一方、カモメ・アジサシ類の中でも別途抽出したコアジサシは、夏鳥であり日本に営巣繁殖のために飛来してくる。博多湾でも砂地等を利用し繁殖地として利用している。主たる保全時期としては、秋から春にかけてが、中心的な保全時期になる。しかし、休憩場については、野鳥の利用を積極的に誘導するためには、フロートにしても他の施設にしても、単に構造物や仮設の設置物があるだけではなく、表面に多くの付着生物が付着している方が多くの野鳥を誘導しやすいことが確認されている。そのため、可能な限り長い期間設置していることが効果をより確実にすると考えている。

○博多湾と日本全国のクロツラヘラサギの越冬個体数を比較すると、かなり高い割合の羽数が博多湾に飛来している。コアジサシ同様、確かに保全が難しいが、市としてあるいは県としてなのかもしれないが、何らかの対策を打たなければならないのではないかと。保全策の中には多々良川周辺で対策を打つとあるが、日本に飛来しているかなりの個体群が博多湾それもアイランドシ

ティ周辺に飛来するため、もっと積極的に何らかの対策をとらなければならないのではないか。コアジサシに関しても、保全対策の中に既存の繁殖地を保全していくとあるが、海の中道で繁殖している数は、はっきりとした数はわからないが10~20羽程度で、たかがしれている。実際、エコパークゾーンの中で繁殖している数は数百の単位である。そのことを踏まえると、コアジサシにとってはシビアな問題であり、港湾局のみで行うのは難しいのかもしれないが何らかの対策をとらなければいけないのではないか。確かに、アイランドシティや香椎パークポートを埋立たから増加した野鳥であるが、せっかく増加したので上手に何らかの対策を打った方が良いと考えられる。積極的に働きかけてもらえればよいと考えている。

□クロツラヘラサギに関しては、昔は博多湾の東部海域に飛来することは無く今津周辺に飛来していたが、アイランドシティを整備していく際にたまたま疑似湿地ができ利用するようになった。先ほどの説明にもあった通り、和白干潟は砂質なため、泥干潟を造成するのにはむかない。仮に泥干潟を造成したとしても維持するのが技術的に難しいことから、現在あるクロツラヘラサギの生息場を保全していく考えである。しかし、何もしないというわけではない。現在あるクロツラヘラサギの生息場を所管している機関と連携しながら保全策を講じていく。港湾局が直接管轄しているエリアではないため、直接手を下すことはできないが、関係機関には当然、協力を要請し保全策をとって頂こうと考えている。

○なぜ日本に飛来するクロツラヘラサギは増えているのか。

□クロツラヘラサギは日本への飛来数だけではなく、世界的に確認個体が増えている。単に関心を持たれたため増えた部分も否定はできないが、近年、世界中での生息個体数も増えたのではないかとされている。ちなみに、十数年前では世界の確認個体数は600~700羽と言われていたが、現在は2000羽を超える状況になっている。そのようなことから、日本に限らず様々な場所で飛来が増えているのが実態だと考えている。

○クロツラヘラサギについては関心をもたれたのが最近であること、羽数があまり知られていなかったこと、繁殖地が東シナ海にある朝鮮半島の北朝鮮側の離島であり、北朝鮮に出入りできる学者が生息状況を発表したこと、ベトナムなどまで個体数が確認されるようになったことで増加したと考えられる。日本への飛来個体が増加しているのは確かだが、あまり明解な答えはでない。

◎日本全体のクロツラヘラサギの越冬個体数の1/3~1/2程度が博多湾で越冬を行っているが、何か要因があるのだろうか。

○分布域は東アジアの限られた地域であり、さほど大きな動きをしない。現在知られている繁殖地は東シナ海の朝鮮半島の離島だけであり、博多湾は、繁殖地から越冬するための渡り距離が短くて済む場所であるからだと考えられ

る。

- クロツラヘラサギの全国の飛来数を12月～2月までの最大羽数で整理しているが、博多湾の東部の利用状況については、月を追うごとに利用場所が多々良川の干潟へ移行しアイランドシティをほとんど利用しなくなる傾向が過去の調査から確認されている。水温が上昇するにつれて多々良川周辺で採餌しやすい環境になることから、生息環境のキャパシティについては多々良川周辺でも十分あると考えている。ただ、採餌のしやすさなどからアイランドシティも利用していると考えられ、クロツラヘラサギが時期によって使い分けしていることも考えられる。アイランドシティ内が利用できなくなる前に、多々良川を管理している福岡県などと共同して様々な対策を考えていくことが一番現実的だと考えている。コアジサシについては、博多湾に限らず全国的に年によって同じエリアでも営巣個体数が大きく変化することが報告されている。博多湾においても平成19年度は、海の中道の外海側で数百羽程度の営巣が確認されている。実際は天敵の被害等によって繁殖まではいかなかったが、既存の周辺砂浜等でも数百つがい利用可能な場所が残されている。そのような場所は当面開発等を行わないため、繁殖地として利用できるような管理のあり方、利用の仕方を考えていくよう働きかけることを考えている。
 - コアジサシについてはそのような形で行うのが良いであろう。クロツラヘラサギについては、餌場より休息地が少なくなる可能性が大きいと考えている。エコパークゾーン内の疑似湿地の生物にはクロツラヘラサギの餌になるようなものはほぼいないため、疑似湿地で採餌はあまり行っておらず、多々良川や飛翔力があるため、もしかしたら今津周辺で採餌をしているのかもしれない。しかし、多々良川周辺で休息地が確保できるかが不安である。今津周辺では中洲があり休憩地として利用されているが、多々良川では中洲があるものの草が茂ってしまい休息地としては適さなくなっていると聞くため、今後、関係機関に協力してもらい休息地を確保するのが一番良いと考えている。
 - 野鳥の保全策として、フロート、人工磯やその他の休憩場の確保など検討されているが、それらは人から見た際には景観形成の要素になる。また野鳥については、昨今野鳥を見ると恐いとの見方もある。保全策や景観形成についても、人からみて受け入れ易く、自分の街がより魅力的になったと認識されるような工夫を検討して頂きたい。そのために必要な基礎調査があれば実施してみてもどうか。
 - ◎貴重な意見だと考えられるため、事務局としても十分検討して頂きたい。現在は試験的に行っている段階であろうが、ある程度調査を行い規模等が明確になった際には景観形成なども考慮して設計して頂きたい。
- 以上、指摘についてまとめると、景観形成への配慮、休息場の確保など積極的に他の機関と共同してコアジサシやクロツラヘラサギの保全策を講じること、保全対象野鳥の生活史などの資料を加えることを前提として保全対策に

ついて了承して頂きたい。

全委員 : (了解)

(議題2 エコパークゾーンで実施した環境保全創造施策の総合評価 事務局説明)

◎委員の方々から質問指摘をして頂く前に、今回欠席された委員から2つほど指摘があるので最初に紹介させて頂き、事務局の考えを回答して頂いたのち、この委員会としてどう取扱うか検討していきたいと思う。1つめは、資料10ページの表-3にある御島ゾーンの覆砂後における底泥中の強熱減量、硫化物の増加をどう位置づけるかということである。見方によっては、覆砂では限界であると考えられる。委員としては、今後の動向について調査が必要ではないかという文言を加えたらどうかということだと考えられる。2つめは、資料14ページの御島ゾーンの今後の方向について、御島ゾーン、香住ヶ丘ゾーンで主要な取り組みとして環境教育だけが期待されているが、環境保全の対応と直接結びつかないため、「多様な藻場の創出、アオサ対策等の環境保全対策やこれら保全対策を通して構築された特徴的な自然環境を活用した環境教育推進などのソフト面の充実」という文言の方がいいのではないかという指摘であるが事務局はどう考えているのか。

□1つめの覆砂に関しては、平成19年もしくは平成20年まで、覆砂した場所について底質、底生生物について確認している。その中で強熱減量、硫化物は覆砂前と同等の状況になっているが、覆砂した場所が覆砂前の状況より悪くなっているわけではない。いくつか覆砂効果がある中で、硫化物等については数年間で覆砂前と同等に戻ってしまい、その後は横ばいで推移していることを考えると、今後の動向についての調査はあえて行わなくてよいと考えている。すでに覆砂を実施して8年9年たっている中での状況であり、環境的にも安定していると考えている。しかし、あくまで御島ゾーンでの状況であり、和白干潟ゾーンにおいて、今後このような環境改善対策を実施していく場合、その効果の検証確認については、和白干潟ゾーンで行っていくことは必要であると考えている。2つめの今後の方向についての文言に関しては、「環境学習の機会の提供等、ソフト面の充実」と記載しているが、その前段を丁寧に記載すべきという指摘だと考えられる。本文中は総括的な表現を使っているが、具体的な内容については、14ページの表-5「環境面の課題と今後の方向」で各ゾーン別に丁寧に記載しているため、全体を読みくだしていく中で資料2-1を活用される方々に理解して頂ければよいのではないかと考えている。

◎委員の指摘と事務局の考えも含めその他総合評価に関して意見、指摘等はないか。

○1つめは、下水道の放水口が変わり、アオサの発生量は以前と変化があったのか。

2つめは、アオサがどこで発生しどこへ流れているのか、また、海域を浮遊するアオサを網で除去し打ち上がるのを防ぐことは考えられるのか。

□アオサの発生量に関しては、発生の実態を適切に把握する方法は確立できていない。あくまで干潟への漂着量という視点でみると、少なくとも陸上回収、海上回収しているアオサ量が、放水口の変更後、目に見えて変化、減少した傾向はみられない。アオサがどこで発生しどこへ流れているかということに関しては、平成6年に和白海域等で詳細なアオサの発生状況、漂流状況の調査を行った際は、和白海域のアオサの発生場所は和白海域の水深 1.5～2.0m より浅い範囲でありそれより深い水深でアオサの発生は確認されていない。また漂流状況に関しては、アイランドシティと雁の巣の間とアイランドシティと牧の鼻の間に観測ポイントを設けて観察したが、和白海域より外側から漂流してくることはなかった。以上のことから、現在和白海域でみられるアオサは和白海域で発生したアオサが大半であると考えている。また発生条件についても、夏季に大型なアオサが発生しているが、夏季の水温が高い時期はほとんどが海底に付着しており漂流する状況ではない。和白海域の海底で付着しているアオサは、その後、風が強くなる影響や、気温が下がり始め付着している箇所が弱くなりちぎれて、潮の流れや風に吹きよせられ干潟へ打ちあがっている状況だと考えられる。

○指摘のあった資料10ページ表—3の強熱減量についてだが、この文章だと悪い雰囲気を受ける。生データをみないとわからないが COD は戻らず強熱減量が元に戻ってしまったということは、良い藻場が形成されつつあるという意味での強熱減量が増加した値とも受け止めることもできるのではないか。良い意味での強熱減量の増加とも考えられるため、改めて生データをみて良い意味での増加と捉えてもいいのではないか。それから、14ページの表—5「環境面の課題と今後の方向」和白干潟ゾーンについてであるが、ラムサール条約を念頭に進めていくのであれば、ワイズユースが一番大切な審査対象になる。もう少しワイズユースの具体的な案を少しずつ進めて頂きたい。すでにあるのであるのなら教えて頂きたい。

□1つめの強熱減量に関しては、生データを確認しても、強熱減量の増加が藻場の形成過程かどうかを確認するデータがない。底質成分（泥）の項目には、葉緑素などは含まれておらず、藻などが生えている状況かを確認することはできない。必ずしも十分な情報がない中で、良くなる要素もあるのではないかという意見はありがたい指摘だが、そのような事を確定できる情報がないため、現状の表現でいかざるえないと考えている。2つめの環境面の課題と今後の方向に関しては、今後和白干潟ゾーン、他のゾーンに関してもワイズユースをどのように行っていくかは重要な点だと考えている。しかし今回の評価の総括に関しては今後の方向性として、このようなものが必要だということに留め、次回以降の本委員会で具体的にどのようなものが考えられるのか、ソフト面でのこれからの施策について示していきたい。

○覆砂に関しては今後面積を増やしていく予定であるのか。

□御島地区に関しては覆砂等のハードの環境改善対策は現状で完了したもの考え

ている。今後は和白海域等でどのようなことを行っていくかの検討を進めていきたい。

◎今の指摘で取り上げられた、ワイズユースの視点を取り入れていく事はとても重要で、もう少し具体的なものを記載できたら記載した方がよいという指摘は、まさに本委員会で今後検討していく重要なポイントだと考えられるため、現時点では総合評価としては現状の記載程度しかないのではと考えられる。唯一付け加えるとすれば、和白海域ゾーンの水域利用で動力船を禁止になったことがあるが、別の委員会で検討されたことなので、ワイズユースの視点に関しては今後本委員会で議論していきたいというところで理解して頂きたい。

○資料14ページの表-5「環境面の課題と今後の方向」についてだが、御島ゾーンと和白干潟ゾーンに関してはワイズユースの視点、海の中道ゾーンに関してはラブアースなどのクリーン活動などがゾーンごとに記載してあるが、ワイズユースの視点、ラブアースのクリーン活動については4つのゾーンともまとめて記載しないと、香住ヶ丘ゾーンだけ行わないということになる。それは違うのでゾーン全体で取り組むこととして記載した方がよい。御島ゾーンに関して、環境学習等の場所として利用していくというのは市全体としての話なのか。和白干潟ゾーンに関して施設を充実していくとは、野鳥公園を視野に入れての表現なのか。

◎1つめは、その通りである。ワイズユースの視点、ラブアース等のクリーン活動を各ゾーンに記載するか、まとめた記載にするかは事務局と私とで検討させて頂きたい。2つめは、資料の表紙のページをみてわかるように、本委員会から提案することなので、市として取り組んで頂くのも当然だが、本委員会で提案することなので、今後本委員会で検討していくこととして私は理解している。以上のようなことでよろしいか。

今回欠席された委員からの指摘に関しては、1つめの強熱減量や硫化合物が増加していることから今後の動向について調査の必要ではないかという指摘に関しては、底生生物の種類数、個体数の増加など良い結果が得られており、今までの調査でそれなりの結果なり結論が得られているため必要ないとする。2つめの今後の方向についての環境学習の機会の提供等、ソフト面での充実の表現を具体的に示した方がよいのではないかと指摘に関しては、資料14ページの表-5「環境面の課題と今後の方向」で詳しく記載されているため、本文中には記載しなくても良いと私としては考えている。その他、指摘意見があったものについては、私なりに整理させて頂き、基本的に現状整理されている形としてまとめたものを本委員会としてご了承していただきたいと考えている。それから、私の方から市への説明等をしなければならないことになっているが、私に一任して頂きたいのだがよろしいか。

全委員 : (了解)

○1点よろしいか。先ほど指摘があった14ページの表-5「環境面の課題と今後の方向性」の和白干潟ゾーンのソフト面にある「施設を充実させていく」という文言が非常に誤解を招きやすい。施設に関係がないということで、ソフト面に記載しているが、施設を充実させるとなっている。立て看板などを想定しており、施設に関係しないということでソフト面に記載してあるのであろうが、施設として記載すると先ほどの指摘にもあった通り野鳥公園など建物を建てると考えられてしまう。

◎わかりました。その箇所は文言を修正させて頂きたい。

(議題2-2 今後の進め方 事務局説明)

◎本委員会で、現在まで行ってきたこと、今後行っていかなければならないことがまとめられているが、それに関して意見、質問は無いか。2年間行ってきた1つの成果が今回示した総合評価となり、今後はこれに具体的な施策を検討していくことになる。

全委員 : (質問・意見なし)

(議題3 和白海域の環境改善対策 事務局説明)

◎今説明のあった和白海域の環境改善対策として、和白海域の環境特性からのゾーン区分、考えられる環境改善手法の選定の妥当性や他の改善手法の提示について、意見及び質問は無いか。

○検討するメニューの6種類は、博多湾に限らず他の水域でも幅広く応用できる技術開発になると考えられる。それらの効果や実験プロセスについてのデータは提供して頂けるのか。

□現在は、これからどのような手法を導入していくか整理を進める段階である。今後、大規模的に一気に行うことは考えにくいので、試験施工を行い、効果確認を行いながら和白海域の中で調査することを考えている。途中段階で効果確認のために行った調査データに関しては、提供することは可能であると考えている。

◎日本各地で環境改善のための様々な手法が行われているが、それらのデータ収集については行っているのか。また、行っていない場合は今後行う予定はあるのか。

□現在、収集を行っており、このような改善手法について国内事例の場所や効果について把握している。しかし、詳細な数値データや何カ年間行っているか等まで把握するには至っていない。

◎福岡市としては、御島で行われたデータしか詳細なデータは無いと考えられるが、他事例のデータについても本委員会で開示するのかまで先ほどの意見に含まれていると考えられる。データ収集することが重要であると考えられるので、可能な限り前例に関してデータ収集を行ってほしい。

○今回の委員会では、検討するメニューの6施策に関して、どの程度まで結論をだ

さなければいけないのか。

- 今回の委員会では、あくまで施策の提示までである。今後、事務局の方で提示した6施策について詳細な検討を行い、次回以降に説明しようと考えている。また今回は、環境改善手法の施策について、追加すべきもの、削除すべきものなどがあれば意見を伺いたいと考えている。
- タイムスケジュールとしては、平成21年度までに施策の検討結果をだし、22年以降実践にうつる予定になっているが、どのように考えているのか。
- 今回の委員会で提示した施策には、土木的な行為を伴う施策と、さほど大規模な施工を伴わない施策がある。平成21年度末までに施策の整理を行うのもあるが、整理されたものが平成22年度以降に全て速やかに動くのは難しい部分がある。市民参加等を加えて比較的速やかな対応が可能である施策と中長期的に対応を考えていく施策の区別を示していきたいと考えている。
- 環境改善手法は13施策あげられているが、その中から6施策を選んでいるのか。以前は、市民と共同で干潟耕耘を行っていたと聞いているが、干潟耕耘はあまり効果が無いから施策から外したのか。
- 干潟耕耘に関しては、いろいろな方々から様々な意見がある状況である。また、干潟の特定の生き物を対象にして、その生物に特化し生息環境を良くするような耕耘の仕方があるという視点であれば積極的な導入も考えられるが、干潟に生息する全ての生き物を対象にした際には、耕耘の規模、耕耘を行う頻度など、どのように行えば有効かを把握しきれておらず、耕耘の効果についても議論がある状況なため、今後具体的に行っていく施策として位置づけることは見合わせた。ちなみに以前、和白干潟で行っていた人力での耕耘については、市の事業として行ったものではなく、市職員の有志や、環境団体の方々、環境に興味のある企業などがボランティアとして行い干潟の環境改善が可能かどうか試したものである。福岡市としては、機械耕耘を一度大規模に行ったが、明確にどれだけ改善されたとはいえず、総合的にみて判断しがたいものがあるため選択肢からは外している。
- 先ほどの和白海域で行う予定の施策の中で、実際に行われている施策を紹介する。まず、貝類による浄化については奈多地区の船溜まりで、資料の写真にある牡蠣筏を設置している。実際に可能かどうか試すため試験的に2008年3月に牡蠣の種付けを行い養殖している。来年度、現在予算要求をしている段階で行えるか定かではないが、御島地区で成功しているアマモ場造成を、エリアを和白海域まで広げて行うことを考えている。
- 環境改善手法一覧で13施策が取り上げられており、検討するメニューでは6施策に減っているが、削った施策の中にも検討しなければならない施策もあり、今後の進め方として考えられる施策は全て検討した方が良いと考えている。選定した6施策の中に吸収された施策もあり半分以下になったわけではないが、最終的には微生物に浄化してもらわなければいけない。具体的には牡蠣殻などを沈めて行うことを考えているのかもしれないが、環境改善手法一覧だけでは、具体的に

イメージできないため、突然 13 施策を 6 施策に削るのではなく、簡単に 13 施策を説明した上で 6 施策を選定した経緯を説明してもらえないとわからない。

- ◎次回までに資料を用意してもらっても良いが、今の指摘に事務局の方から何かないか。
- 今回十分な資料を準備してないため、各施策の技術の特徴なり課題なり次回改めて説明させて頂きたい。検討するメニューの 6 施策以外の削った施策を簡単に説明する。例えば、人工干潟等については、和白海域では和白干潟が 80ha も残されている状況の中で、あえて作る必要がどの程度あるのかどうか。また、和白干潟を拡大するのでなければ、人工干潟を造成するための構造物が必要となり、それによるマイナス要因も否定できないため現状においては好ましくないと考えて外している。多自然方護岸や護岸構造物に近い礫間接酸化法は、すでにアイランドシティ、周辺の海岸整備で現状において進められるべき箇所は整備されている中で、今後、新たに行う予定がないため外している。微生物による浄化については、具体的にある微生物を使って行うものだが、技術的に必ずしも大規模な箇所での実用段階と言えないため外している。詳しいことについては、できれば次回資料を用意したい。
- 次回の委員会にあたりお願いする意見だが、課題については資料 3 に記載している以外にもたくさんあると考えられる。例えば覆砂については、土砂の確保の問題、コストの問題や御島であったように 5 年程度で効果がなくなってしまう課題などがある。今回は、詳しく課題を列挙してもらわないと検討できないのでお願いしたい。
- 貝類による浄化が期待される牡蠣筏について伺いたい。いくつかある施策の中で、牡蠣筏だけが流通商品を生産できる可能性があると考えられる。将来どの程度の規模で行うのかということもあるが、水質浄化を目的に設置したものが 2 次的に流通商品を生み出す可能性についても検討する機会があるのか、商品流通として考えるのは論外であり他の方法を考えるのか、教えて頂きたい。
- 今回提示している手法に関しては、大規模なハードなものではなく、商品流通という視点、市民の方々、環境団体の方々と共働で実施できる可変的フレキシビリティの高いような技術もあると考えている。実現可能性を検討していく中で多様な側面から検討して費用対効果論など総合的に検討していきたい。
- 補足すると、牡蠣などを収穫し商品として流通させると考えると、漁業権の関係がでてきて、非常に問題が複雑になる。商品流通させる場合には、成果物の扱いについて、よく考えていきたい。
- 一市民として、5 年後 10 年後 15 年後 20 年後の博多湾が魅力的にみえるが、先ほどの商品流通を企業の方々が競って行ってもらうことや、導流杭の杭にスポンサーをつけるなどして、全て福岡市で行わなくても良いのではないか。例えば、お金持ちの方や企業にスポンサーになって頂いて行うことなどはできないのか。福岡市だけで、深刻にやる必要はないのではないか。

- 杭に名前を記載するのか。
- 企業名でも個人名でも良い。
- 公園などを造成する際に、ベンチに出資してくれた人の名前を入れるなど、資金の調達方法がある。福岡市で行う際に、そのような方法が採用できるかどうか今後検討してききたい。
- 熊本の八代の方でアマモ再生を行っており、一株単位で株主を募集して行っている。そのような形でうまくできるのではないかと。
- ◎そのような事例を詳しく教えて頂ければ、博多湾でも導入できるのではないかと考えられる。
- 導流杭や筏は香住ヶ丘など同じ流域の間伐材を使用するのか、全く違う流域のものをういていくのか次回提示して頂きたい。市民としての意見だが、浅場や覆砂を行う際は、アイランドシティで埋立っているのに、規模は違うものの、もっと埋めるのかという意見がある。優先順位はどのように考えているのか。
- 今回はメニューを提示する段階なため、事務局側として優先順位は考えていない。それぞれの手法については、効果と課題があり環境面でマイナス要因を持っている恐れがあるような施策については、解消法についても十分に検討したうえで、優先順位などを整理していきたいと考えている。
- 市民からの協賛金を含めての事業に関しては、市民からの理解を得ることが重要となってくると考えられる。アイランドシティ近辺ではいつも工事が行われるといった反感をかうような体制ではなく、このような委員会で検討している内容をきちんと整理し理解して貰うアプローチも大切にしていかなければいけないのではないかと考えている。街づくりにも影響することなので、悩みを減らす方向でいい結果を生みだしていきたいと考えている。
- ◎基本的には、本委員会も含めて公開になっている。話された内容、得られた結論などを福岡市が公開している。ただ、公開しているとはいえ、ホームページ上に記載する等だけなので、もう少しこちらから積極的に公開する視点も重要だと考えられるため、今後、本委員会としても市民に理解して頂けるような公開をしていきたい。
- 牡蠣の養殖に関してだが、以前アオサについては、重金属も含め成分を分析して頂いたので、今回牡蠣を収穫した際にも分析して頂きたい。
- 人間の口に入るものなので、十分に分析及びチェックをさせて頂きたい。
- ◎非常に活発に意見を頂き感謝している。委員の方々から他に意見がなければ資料3についても終わらせて頂きたいのだがよろしいか。非常に多くの賜った意見を含め、各施策を詳しく提示し施策を選定したプロセスについての説明、優先順位の提示、各ゾーンごとの施策の検討、他事例の収集などについて次回提示して頂きたい。